

創造理数科企画 アート・セッション

6月18日(土)、創造理数科1年生を対象に、STEAM教育の一環としてアート・セッションを実施しました。

この企画は、東京フィルハーモニー交響楽団コンサートマスター近藤薫先生を筆頭とする弦楽四重奏の演奏家4名が、レクチャーを交えながら様々な曲を演奏し、川の水音や木立の音等と共に音楽を聴くというもので、第1部は屋内、第2部を屋外で行いました。

当日、生徒たちは、この企画がどのようなものなのかについて事前に知らされずに多目的ルーム集まりました。司会者から、「この企画はSTEAM教育のA(Art)にあたるサプライズイベントです。」と知らされた直後に、弦楽四重奏でバッハの「G線上のアリア」を聴いてもらいました。

二曲目の「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」の演奏からは、ヨーロッパの歴史を辿りながら、時代とクラシック音楽の関係を読み解き、ヨーロッパの王政から現代にかけて音楽家たちの表現形式の変遷のお話を伺いました。

近藤先生は、東京大学先端科学技術研究センター特任教授として、様々な場所で演奏を行い、芸術とは何かを問い続けておられ、生徒たちに、「芸術作品への感じ方は自由」「芸術は『最適解』を求めるものではない」「それは言葉にならないものだ」と語りかけました。これまでの演奏活動のエピソードとして、ウポポイ(北海道白老郡白老町)の森での「赤とんぼ」の演奏後にタイミングよくカラスが終わりを告げる鳴き声があった話が紹介され、会場の笑いを誘い、第2部へと移行しました。



第2部は、生徒たち全員で敷物を運び、各々お気に入りのマグカップを持って、立川公園根川緑道に移動しました。NATURE-CENTERED CONCERTの始まりです。川のせせらぎと鳥のさえずりが聞こえる木陰での生演奏を満喫し、また、豊かな自然環境で演奏された究極の一曲であるジョン・ケージの「4



分33秒」を通じて、究極のクラシックを「感じる」ことができたと思います。

演奏後のフリートークの際、生徒たちはマグカップで、冷たいハーブティを飲みながら、「芸術家と初めて、会話をしました。」「その楽器はいくらですか?」など、高校生らしい率直で楽しい会話をリラックスしながら演奏者とともに余韻を楽しんでいました。